

事件(4/5)1周年

は両立しない?!



東京外国語大学教授
中嶋 嶺 雄



華国鋒主席

無視できぬ民衆の周路線希求

いま、中国の民衆は、この四月五日の清明節を、かたずをのんで待っている。華国鋒主席らの指導者たちも、今年の清明節を特殊な緊張と不安のなかで過ごさねばなるまい。

だれもが去年の清明節を襲った驚天動地の「大衆反乱」——天安門事件を思い起こさざるをえないからであるが、そこにはいま、三つの大きな問題が存在する。

まず第一には、古来、故人の霊をしのぶ節句である今年その日は、毛主席亡きあと初めての清明節だということである。昨年一月、周恩来逝去のさいには皆が号泣したのとは対照的に、さる九月の重陽節に逝った毛沢東に対しては、多くの人々はその死を「解き放たれた死」と感じただけ

反動的な陰謀事件だと当時断罪されたのだが、このような評価が公式にくつがえるかどうかという問題がある。わずか一年のうち政治路線上の評価は完全に逆転し、いまや「四つの現代化」（工業、農業、国防、科学技術の現代化）という周恩来、鄧小平路線が復権している今日、そもそも今日の華国鋒指導部は天安門事件一周年をどう位置づけるのであろうか。論理的には、当然、評価を逆転させ、いちやく江青夫人らを激しく非難した当時の逆賊を正義の士に、暴徒を英雄に、反革命事件を革命的起義にしなければならぬはずであるが、それが可能かどうかである。

か、「四人組」打倒の北京政変によって、過去四十年近く毛主席最愛の妻であった江青夫人がいま口汚くのしられている折だけに注目しないわけにはゆかない。

第二には、「秦始皇の封建社会は再び返らず（去らば去れ、毛沢東の封建的時代よ）」との含意あり——引用者、……四つの現代化なりし日には、われら酒を供えて祭らん」といった詩を張り出したがゆえに、「四人組」指導下の当時の党中央からは逆賊、暴徒、反革命分子とみなされ、この事件はきわめて

第三には、「右からの巻き返しを企図した反革命陰謀事件の黒幕」だとして、事件直後の四月七日、すべての公職を追われた鄧小平が、注目の再登場を果たすかどうか、という大問題である。この場合、すでに本年一月の周恩来一周年前後の北京では、一方で華国鋒への英雄崇拜が強化されている矢先（最近の中国では、いたるところに毛主席の写真と並んで華国鋒主席の写真がはらんしている）、民衆のあいだでは、鄧小平再復活を求める刺激的な壁新聞が存在していたことを無視できないで

特別寄稿

天安門

再復活

鄧小平と華国鋒



鄧小平

報やうわき話、さらには中国要人の度重なる非公式談話などにもかかわらず、今日まで遅れているのだからか。それは、鄧小

それにしても、北京政変以来、中国内政における「鄧小平の影」は日一日と色濃くなってきた。だが、鄧小平復活近しとしばしばいわれながら、今日まで、それが実現しそうで実現しないのはなぜであろうか。一部の報道は例によって、鄧小平の「病をなおす」ための手続きが完了せず、鄧小平解任を決めた「毛主席の指示」との関係で調整に手間どっているとか、近く復活した暁には、華国鋒主席を大いにたすけ、車の両輪のような華—鄧体制がまもなく形成さ

クーデターで政権を掌握す!

あろう。そして、忘れてならないことは、去年の清明節当日、周恩来首相の巨大な遺影が民衆によって広場の人民英雄記念碑に掲げられたとき、赤い小瓶が

その写真にヒモでつるさされていたというウイットに富む事実である。「小瓶」は「小平」、つまり周恩来路線の実行者としての鄧小平を指すのである。それよう、などと述べている。こうした見方は、あたかも、毛主席死去のさい、後継のリーダーたちが必ずや集団指導制をとるであろうとみなしたのと同様、中国の政治文化の特質や文化大革命以来の中国内政の酷烈な現実をかえりみずに、中国の今日の指導部が依然として仲よしクラブであるかのように考えていることになる。

だが、はっきりしているのは、鄧小平の再復活こそ、華国鋒体制の危機であり、華国鋒その人の前途に大きな不安をもたらすものであることである。なぜ鄧小平の復活がさまざまな情報やうわき話、さらには中国要人の度重なる非公式談話などにもかかわらず、今日まで遅れているのだからか。それは、鄧小

平の再登場が、華国鋒の立場を脅かすがゆえに、華国鋒としては鄧小平の再登場を決して望まないからには、かならない。反面、党・政・軍のなかでの鄧小平支持基盤はきわめて強固であり、民衆の支持も根強いだけに華国鋒としても鄧小平の再登場を阻止しえないであろうが、鄧小平の復権が遅れているのは、

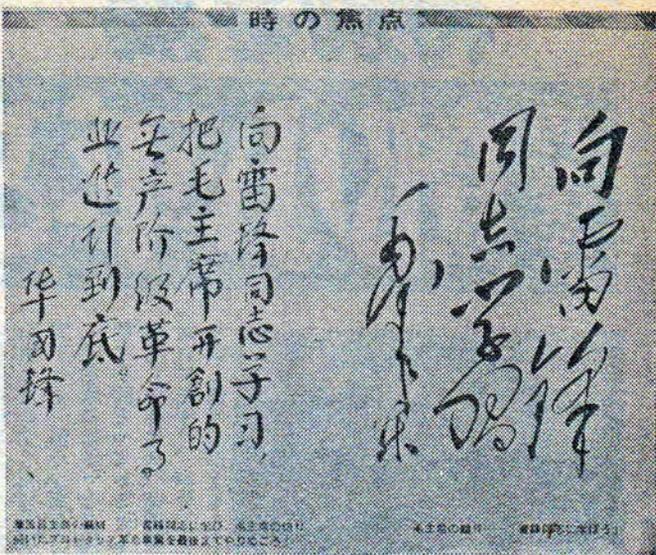


このような政治的文脈においてであることは明白である。このことは、過去一年あまりの鄧小平と華国鋒の立場を、両者の経歴に照らしてみれば一目瞭然ではなからうか。鄧小平が最後に公衆の前に姿を現したのは昨年一月十五日、周恩来葬儀にさいして弔辞を読んだときであった。このとき、鄧小平は「四つの現代化」路線の継承を誓って周首相を葬送したのだが、そのことにいらだつた文革派のリーダーたちは、急速、「走資派」批判のキャンペン

まああくてちっちゃくてさんかく
 くいちごみるくはハッピーな
 ハッピーなキャンデー
 コリコリっとたべられるから
 コリコリっとたべちゃうのです。

サクマ製菓株式会社
 東京・渋谷

時の焦点



「北京周報」に載った華国鋒主席と毛沢東主席の題辞

ーンを開始した。かくて、内外に公認であった鄧小平の首相昇格は阻まれ、二月八日、華国鋒の首相代理就任が確認されて、世界は驚いたのである。やがて「走資派」批判のキャンペーンが進むなかで天安門事件が起こったが、事件直後の四月七日、党中央は、鄧小平の解任と華国鋒の党第一副主席兼首相任命を「政治局は一致して可決」したとして発表したものであった。つまり、二度にわたる華国鋒の政治的台頭はいずれも、まさに鄧小平をけ落としてこそはじめて可能であったのである。もとよ

り、華国鋒としては、天安門事件に示された毛沢東政治への根強い批判の潮流に驚き、とくに、江青夫人や姚文元らの毛沢東側近、すなわち文革派上海グループに対する激しい批判を目撃して、毛沢東の病状悪化を横目に次第に上海グループから離反していった。つまり、華国鋒、汪東興らの非上海グループ文革派はこうして「毛沢東以後」に備え、昨夏の河北大地震のころには、その救援活動においても、民兵中心の江青らの勢力を抑えようとしていたのであった。そして、毛沢東の死。あせった江

青夫人らは「既定方針どおり事をはこぶ」との「毛沢東遺訓」をタテに権力の継承を求め、いちはやくプレスキャンペーンに出たのだが、喪の明ける前日、華国鋒、汪東興らの陰の力によって一網打尽にされてしまったのである。もとより、民衆も、幹部も、「四人組」への根強い批判を宿していただけに、この

それだけに華国鋒としては、これまで毛沢東体制を形成してきた同志がなぜ最悪の反革命分子として処断されねばならないのかを理論的に説明しなう言葉を持たない。いわば自作自演の政変劇を正当化する根拠に乏しく、自己の正統性の根拠に乏しいのである。このような華国鋒に可能なのは、「四人組」への非難・攻撃・罵詈の集中と自らの英雄崇拜、昨年四月三十日に毛主席は「あなたがあれば私は安心だ」といったという毛主席のお墨付きの競い合いでしかなく、また幹部や民衆は、「四人組」打倒の「下手人」としてしかまだ華国鋒を認めていないように思われる。

こうした点こそ、北京政変以後はや半年、あれほど重大な政治の転換があったにもかかわらず、華国鋒指導部は党中央委員

青夫人らは「既定方針どおり事をはこぶ」との「毛沢東遺訓」をタテに権力の継承を求め、いちはやくプレスキャンペーンに出たのだが、喪の明ける前日、華国鋒、汪東興らの陰の力によって一網打尽にされてしまったのである。もとより、民衆も、幹部も、「四人組」への根強い批判を宿していただけに、この

壮挙には歓喜した。だが、十月七日の北京政変当日、党中央は華国鋒を党主席兼中央軍事委主席に任命していることにも明らかのように、華国鋒は「四人組」を捕えておいてはじめて最高権力を掌握できたのであり、北京政権は明らかに華国鋒のクーデターであった。

実権派として激しく批判され、当時、訪中した私は南京路の路上にも陳丕顯批判のスローガンが大書されていたことをよく覚えていた（この点について私はかつて一九六七年春の「読売新聞」大特集「これが中国だ」第二部⑩「実権派とは何か③」で詳しく論じた）。
こうなると北京市長だった彭真の復活さえ展望されるのだが、こうして実権派が次々に復権し、周恩来、鄧小平路線が内政・外交の基本方向としてはますます大きな意味を持ちつつあるだけに、華国鋒の不安は大きいといえよう。
中国では現在、華国鋒の書が毛沢東の書と並べてあちこちで発表されている。だが、毛主席のあの達筆に比べるべくもないほど華国鋒の筆跡はつたない（写真参照）。文字の国、書の国の民は、はたして、このような字しか書けない華国鋒を自らの指導者として仰いでゆけるのであろうか。
この点も「鄧小平の影」が増幅せざるをえないゆえんである。
そして、もしも清明節前後に鄧小平が注目の再登場を遂げるなら、それは鄧小平、華国鋒間の新しい闘争の始まりだとみななければならぬ。

四人組処断をどう理論づける

長又